

パネルディスカッション「里山に託す私達の未来:里山とゴミ」

プレゼン&コーディネーター

藤原 寿和氏（残土・産廃問題ネットワーク・ちば代表）

【プロフィール】

早稲田大学理工学部応用化学科卒業後、1972年、東京都公害局（現環境局）に就職。産業保安行政に14年、水質保全行政に12年、大気保全行政に8年（うち自動車公害対策に5年）従事。現在、環境局多摩環境事務所管理課一般ガス冷凍係に勤務。その一方で、1997年、有害化学物質による汚染から、人の健康と生態系を守るため、化学物質問題市民研究会を結成。化学物質の総量規制をめざし、市民向けの公開講座や政府への提言などに取り組む。止めよう！ダイオキシン汚染・関東ネットワーク事務局長、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議常任幹事、廃棄物処分場問題全国ネットワーク事務局、カネミ油症被害者支援センター事務局長、有害化学物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク代表。著書に『化学物質の逆襲』『ダイオキシン・ゼロ社会へ』『奪われし未来を取り戻せ』ほか。

【プレゼン】

里山は地域の自然循環系のなかで多様な生物種の構成によって自然生態系が保たれ、また植生や湧き水、田園的な風景による景観的価値を有し、そこには雑木林の利用や農作物の生産、たい肥づくりなど人の活動との接点もある貴重な空間。その空間にゴミが不法投棄されたり、あるいは廃棄物処理施設が建設されることによって、これらの地域循環系が破壊され、人を含めてあらゆる生き物にとって生息しづらい環境になってしまう。

私達の先人たちは、里山という自然環境系のなかで環境との調和を保ちながら暮らしてきた。そこには自然を見つめる優しさと生きていく上での糧を作り出してきた創造的な営為があった。それらが近年高度経済成長と物的な豊かさを追い求めてきたなかで、「金銭に換えられる」土地空間や資材としか価値を見出せなくなってきたことで、物心両面にわたる価値を喪失してきたのではなからうか。

もう数年前になりますが、残土・産廃問題ネットワーク・ちばの主催で「残土・産廃」問題を考える集会を開催した際に、市原市古敷谷の山林に不法投棄された産廃の撤去問題に立ち上がった地元の方々が、「かつて炭焼きで暮らしと生計を立てていたときには、産廃問題はなかったし、健康への不安もなかった」と言われた言葉が脳裏に焼き付いています。里山がゴミ捨て場と化すことによって、そこから大気や水系に流れ出す有害な化学物質によって環境は汚染され、その影響は現世代よりも次世代や継世代に現れることとなります。

現世代を生きる私達は、未来世代が安全・安心で健康な生活を享受することができるために、今何をなさねばならないのか、里山という一つの重要な環境に焦点をあてて、その自然の保全とそこに暮らす人たちの生き方や文化や産業のあり方などについて語り合うことが必要ではないかと思えます。

私達は、今回の「里山に託す私達の未来:里山とゴミ」をテーマにしたパネルディスカッションで、以下のような視点に立って活発な論議ができることを願っています。

- ☆ 里山に捨てられるゴミや残土の実態は
- ☆ 里山に生きる人たちの暮らしと未来に託す思い（夢）は
- ☆ 里山を活かすまちづくりとゴミとの闘いは
- ☆ 里山保全のために今必要とされる政策は
- ☆ 里山の再生と保全のための「ちばモデルプラン」の策定を！